

「二」父・母と小・中・高の思い出

はじめに―古稀より古希―

「人生七十、古来稀なり」（杜甫「曲江詩」）という。しかし、近年の国勢調査によれば、男性の平均余命満八十歳（女性は85歳有余）に迫る今日、七十歳では何ら珍しくない。

とはいえ、戦時中生まれて体の弱かった私が、平成二十三年末で満七十歳を迎えられる健康に恵まれていることは、まことにありがたい。それゆえ「古稀」を自祝すると共に、平均寿命に近づく希望を込めて「古希」と記し、この機会にわが人生を振り返ってみたい。

私も歴史家の端くれとして、単なる個人的な回想ではなく、七十年に及ぶ現代史との関わりも考えながら、自分がどのように生きてきたかを記録しておくことには、多少意味があるかもしれない。

そう思って、この随想を書き始めたところ、親友の吉成勇氏が主幹を務めておられる本誌月刊『歴史研究』に、拙稿を連載して頂けることになった。感謝にたえない。

昭和十六年十二月に岐阜で誕生

名前は時代を投射する。私の一年先輩には、紀や元の字を用いた名前が多い。昭和十五年（AD1940）が、いわゆる皇紀（神武天皇即位紀元）二六〇〇年だったからである。

その翌年（1941）十二月十二日の夜、岐阜県揖斐郡小島村小島（現揖斐川町小島）野中の所家（小作農家）に生まれた。父久雄（大正元年生まれ）と母かなを（大正五年生まれ）の長男である。名前は父が「勲」より画数の少ない「功」に決めたという。

その四日前に米英などとの間で伸るか反るかの戦争が始まっていた。これを昭和十二年以来の「支那事变」も含めて「大東亜戦争」と命名する閣議の決定が十二日である。そんなニュースをラジオか新聞で知り、いずれ召集されるかもしれない息子の武勲・戦功を念じて考えた名前なのであろう。

厳父の戦死と慈母の教訓

父は田舎の尋常小学校高等科を「学業優等・操行佳良」で卒業し、稲作農業に専念していた。母も小学校を卒え岐阜市の名家で女中奉公しながら御稽古ことを習い、昭和十三年四月に親戚筋の所家へ嫁入りしたのである。

母によれば、父は自分に厳しい正直一筋の頼もしい人であった。私が生まれて七ヶ月目に赤紙召集を受けて出征。一年後の昭和十八年七月二十七日「ソロモン群島ニュージョージア島ムンダの戦闘に於て腹部砲弾破片創により戦死」(公報)をとげた。

当時、二十七歳の手前で未亡人となった母は、私を育てるため必死に働いた。しかし、誰に対しても慈しみ深く朗らかな人で、私に悲しい思いをさせた覚えがない。

ただ、かなり我俣わがまに育ちつゝあつた私を、仏壇の前で叱る時は「靖国のお父ちゃんが、いつでもどこでも功を見てるよ。お父ちゃんみたいに死ぬ気でやれば、できんことはない」というのが、いつも口癖であつた。

その母は、近所の友達に勧められて五十歳の時から日本生命に勤め、平成十九年七月十日、満九十一歳近くで家族に看取られて父のもとへ旅立つた。

由緒ある小島村の小中学校

敗戦後間もない昭和二十三年(1948)春、揖斐川上流の村立小島小学校へ入り、同三十二年春、小島中学校を卒業するまでの九年間、ニクラス約九十人とのんびり過ごした。

この小学校は、明治六年(1873)「二宮神社にのみやの祀官宅しかんで創められた「兼藝舎いしや」に由来す

る。その数年後、地区民の寄付金により造られた校舎の写真が現存する。私どもが学んだ木造校舎のうち、戦時中に落成した当時の講堂は見事な造りである。

しかも、私どもが中学へ進んだころ出来た校歌は、蕉門支考の嫡裔各務虎雄先生が作詞されている。その冒頭に「小島の宮の跡どころ、山門高し瑞巖寺……」と詠まれている。それを解説された社会科担当（中一クラス担任）岩井亭乙教諭によれば、村の奥にある臨濟禅瑞巖寺は、南朝の正平八年（北朝の文和二年（1353）、足利義詮の奉ずる後光厳天皇が滞在された頓宮（仮御所）である。当時の様子は、来訪した関白二条良基の随筆『小島のすさび』（「群書類従」など所収）に詳しい。その影響で、当地には今も連歌の集いがある。

大垣北高の恩師と歴史同好会

私^{しんぞこ}が心底から歴史好きになったのは、昭和三十二年（1957）春、岐阜県立の大垣北高校へ入学してからである。そこで巡り会った稲川誠一教諭の影響が大きい。

先生は、昭和二十年春、鹿児島島の七高造士館から東大文学部へ進み、国史学科主任教授の平泉澄博士に師事された。博士は敗戦により辞職して郷里福井へ帰られたが、稲川先生は東大の大学院に進まれてからも博士の指導を仰ぎ、鎌倉時代公武関係史の研究を続け、卒業

後しばらく民俗学研究所などに勤めておられた。

この先生が、両親に孝養を尽くすため郷里大垣へ戻り、北高に満三十一歳で来任。一年次の世界史と二年・三年次の日本史を担当されたが、そのユニークな授業は今も忘れられない。しかも、先生は歴史の好きな生徒を集めて「歴史同好会」を作り、その学内サークル活動だけでなく、毎月一回、御自宅での読書会や史蹟の見学会も実施された。

さらに、先生は新聞部の顧問であったが、二年生の私が生徒会の役員に選ばれると、的確なアドバイスをされ、また伊勢湾台風で拙宅の納屋が火災にあうと、物心両面の応援を下さった。

しかも、一番驚いたのは、三年次の冬休み、先生が日本教職員組合を決然と脱退され、数少ない全国の有志たちと教育正常化のために教育研究協議会を作られたことである。

そのころ日教組は絶大な力を持っていたから、先生は猛烈な攻撃に晒さらされた。それでも全く怯ひまず、堂々と授業を続けられる姿に、畏敬の念を覚えた。